

HISTORY OF KUNIHIRO SHIMIZU 清水邦広

KUNIHIRO SHIMIZU
【バネソニックバンサーズ】
1986年8月11日生まれ 福井県福井市出身
ポジション/ウイングスパイカー
福井工大附福井高一東海大
身長/193cm
最高到達点/345cm

夢は、誰よりも大きく。

日本のエースと「ロンドン」への飛翔を誓う、清水邦広。福井の大地ではぐくまれた、つかい夢に向かっつた走るバブルレフティのルーツに迫る。
文 田中タチ 写真 平野敏久



「スポ少に入って、バレーがやりたい」 何を勧めても嫌がった邦広が、唯一、 自分から「やりたい」と意思表示したものの、 それが、バレーボールだった。

「バレーがやりたい」 引つ込み思案な少年に 芽生えた初めての意思

1986年8月11日、福井県美山町で一人の少年が産声を上げた。3400g、52cm。プクとした丸い顔の少年は「多くの人に愛されるように」と「邦広」と名付けられた。

人見知りが激しく、おとなしい、引つ込み思案の幼少期。

母・香代子の述懐。

「おばあちゃん子でね、小学校から帰ってきておばあちゃんがいないと、一人で畑まで見に行くんです。見つけたらホッとして畑仕事を手伝う。何ができるわけでもないから、小さなバケツに石ころを入れるだけなんですけどね。手のかからない、優しい子でした」

小学校6年生の夏休みに開催される、地域の子供たちを対象としたキャンプ実習。参加者は、希望した者のみ。母は、引つ込み思案の息子が外へ飛び出すきっかけになればと、申込書を書いて邦広に渡した。ところが、何日たっても、学校からは何の連絡もない。不思議に思い、本人を問いただしたところ、邦広は白状した。

「知らない人ばかりのキャンプなんて行きたくない。(申込書は)出してない」

自分には教えられないし、子供のころに習ったほうがいいから、と母が水泳教室に通わせようとしても、返ってくる答えは同じ。

「嫌だ」

何を勧めても嫌がった邦広が唯一、自分から「やりたい」と意思表示したものの、それが、バレーボールだった。

初めてボールに触れたのは、小学校3年生のころ。母がママさんバレーの練習をするかたわらで、集まった子供たちとのバレーボールのまね事を楽しみを見いだした。

もともと美山町はバレーボールの盛んな地域で、清水が通った上宇坂小学校の5、6年生を対象にしたスポーツ少年団もある。小学校4年生の邦広が、初めて母に申し出た。

「スポ少に入って、バレーがやりたい」

規則では入団できるのは5年生から。でも息子に芽生えた初めての意思。何とかかなえてやりたい。母は学校に掛け合った。すると、当時の校長先生から意外なほどあっさりとして、入団許可を得ることができた。母は、今もその言葉を忘れられずにいる。

「本人がやりたいと思ったときにやらせてあげなさい。そうすれば、きっと長く続いていくものになるから」

バレーだけでなくスポーツ教育に熱心だった同小学校では、季節ごとにソフトボールや卓球、スキーなどさまざまなスポーツを並行して子供たちに取り組ませた。同級生の多くがこの時期のソフトボールに楽しみを見いだした。

「野球選手になりたい」と夢を描くのと同様に、清水も「中学生になったら野球をやろうかな」と思った時期もある。内心では「バレーを続けてほしい」と思いながら、選択を息子に委ねた母へ、邦広は言った。

「野球も面白いけど、バレーのほうがコートの中でたくさん動けるから楽しい。やっぱり、バレーにしようかな」

十数年後、JAPANを背負うエースになることなど、このときは誰も想像しなかった。

いや、違う。実は一人だけ、その可能性を見いだしていた男がいた。

その才能に気がついた 監督との出会い

美山中学校バレー部顧問の松本義昭(現在は足羽第一中学校教諭)が、最初に清水を見たときに抱いた印象は、至って普通のものであった。山村地帯で育った、純朴で、少しやんちゃだけれど決して特別ではない、どこにでもいる中学生。

ただし、身長は170cm、小学生のころからバレー経験もある。当時の美山中は2つ上の世代、邦広の兄・教治たちが全国大会に出場し、ベスト8入りという快挙を成し遂げたばかり。バレー部に来い。松本は、熱心に体験入部を勧めた。

「実際の動きを見て、非常に能力が高い選手だと。『日本代表で活躍するような選手に育てよう』と思って接してきました」

松本は福井工大附福井高校の出身で、現在42歳。高校時代、2つ下には荻野正二がいた。高校からバレーを始めた荻野が、同校バレー部監督(現・部長・堀豊の指導下でメキメキと上達していく姿を目の当たりにしてきた。荻野が持っていた光る要素を、松本は清水に重ねた。

予感が確信に変わったのは5月、3年生を主体にしたA・B戦で清水のプレーを見たときだった。

A、Bともに3年生が主体だったが、清水も1年生ながらBチームに抜てきされた。そして、左手から放たれるスパイクが面白いように決まる。1点、また1点、気づいたら1セット目はBチームが勝利していた。

「ほぼ100%清水にトスを上げ、それをすべて決めてしまう。あの決定力は並じゃないと驚かされました」



初めてボールに触れたのは、小学校3年生のころ。母がママさんバレーの練習をするかたわらで、集まった子供たちとのバレーボールのまね事を楽しみを見いだした。

もともと美山町はバレーボールの盛んな地域で、清水が通った上宇坂小学校の5、6年生を対象にしたスポーツ少年団もある。小学校4年生の邦広が、初めて母に申し出た。

「スポ少に入って、バレーがやりたい」

規則では入団できるのは5年生から。でも息子に芽生えた初めての意思。何とかかなえてやりたい。母は学校に掛け合った。すると、当時の校長先生から意外なほどあっさりとして、入団許可を得ることができた。母は、今もその言葉を忘れられずにいる。

「本人がやりたいと思ったときにやらせてあげなさい。そうすれば、きっと長く続いていくものになるから」

バレーだけでなくスポーツ教育に熱心だった同小学校では、季節ごとにソフトボールや卓球、スキーなどさまざまなスポーツを並行して子供たちに取り組ませた。同級生の多くがこの時期のソフトボールに楽しみを見いだした。

「野球選手になりたい」と夢を描くのと同様に、清水も「中学生になったら野球をやろうかな」と思った時期もある。内心では「バレーを続けてほしい」と思いながら、選択を息子に委ねた母へ、邦広は言った。

「野球も面白いけど、バレーのほうがコートの中でたくさん動けるから楽しい。やっぱり、バレーにしようかな」

十数年後、JAPANを背負うエースになることなど、このときは誰も想像しなかった。

いや、違う。実は一人だけ、その可能性を見いだしていた男がいた。